日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点

野田 尚史（国立国語研究所）、中島 晶子（パリ・ディドロ大学）
村田 裕美子（ミュンヘン大学）、中北 美千子（国立国語研究所）

要旨

中級日本語学習者が日本語母語話者と対話をしているとき、相手の発話をどう理解しているかを調査したところ、学習者は対話相手である日本語母語話者の発話に対して特に次のような誤解をしていることが明らかになった。

(a) 質問文についての誤解：自分に対する質問文を質問ではないと誤解したり、何を質問されているかを誤解する。
(b) 否定文についての誤解：否定文を肯定だと誤解し、肯定文を否定だと誤解する。
(c) 省略文についての誤解：省略された主語がだれのことかを誤解する。

対話の教育では、どのように発話するかという「話す」教育だけではなく、相手の発話をどう理解するかという「聞く」教育も必要である。「聞く」教育では、特に質問文、否定文、省略文を適切に理解するための教育が重要である。

【キーワード】　中級日本語学習者、聴解、質問、否定、省略

1　研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者が日本語母語話者と対話するとき、どんなところの聞きとりが難しく、どんな誤解をしているかを明らかにすることである。

日本語学習者は、母語話者と対話をしているとき、相手の発話の意味を適切に理解できず、そのために対話がうまく進まないことがある。

学習者にとってどんなところの聞きとりが難しいかを明らかにするために、実際に母語話者と対話をしてもらった上で、その録画を見ながら相手の発話の意味を自分の母語で語ってもらう調査を行った。

2　研究の位置づけ

これまでの対話の研究では、学習者がどのように話しているかという研究は盛んに行われてきた。中・上級学習者の談話展開を分析した渡邊亞子（1996）のような研究である。

一方、学習者が相手の発話をどのように理解しているかという研究は、野田尚史・阪上彩子・中山英治（2015 予定）など、わずかである。本研究は、これまで研究があまり行われてこなかった「学習者が相手の発話をどのように理解しているか」を扱うものである。

3　調査方法

ヨーロッパの言語を母語とする中級日本語学習者に日本語母語話者と対話をしてもらい、対話相手の発話について理解した内容を自分の母語で語ってもらう調査を行った。

3.1　調査協力者

調査に協力してもらったのは、ドイツ語、フランス語、英語、イタリア語を母語とする中級日本語学習者である。ドイツ語話者 15 名、フランス語話者 15 名、英語話者 5 名、イタリア語話者 5 名の合計 40 名である。

3.2　調査方法

調査方法は、次の(1)から(3)のようなものである。

(1) 中級日本語学習者に日本語母語話者と対話をしてもらう。特にテーマを決めない「雑談」で、対話時間は 20 分から 30 分程度である。そのときの母語話者の映像を２人の音声とともに録画しておく。

(2) 対話が終わったあと、学習者に、録画した映像を見ながらその音声を少しずつ聞いてもらい、理解した内容や理解できないところを自分の母語で語ってもらう。

(3) 学習者に語ってもらった内容だけでは、どう理解したかがよくわからないときや、そのように理解した理由がわからないときは、それを確認するための質問をその学習者の母語で行い、答えてもらう。

4　調査結果

学習者が雑談全体の理解にも大きな影響を与えるような重大な誤解をしている例で多かったのは、次の(4)から(6)のようなものである。

(4)　質問文についての誤解

(5)　否定文についての誤解

(6)　省略文についての誤解

(4)、(5)、(6)の誤解については、それぞれ次の 4.1、4.2、4.3 で例をあげて説明する。

4.1　質問文についての誤解

学習者は対話の中で自分に対する質問文を質問ではないと誤解したり、何を質問されているかを誤解することがある。その結果、相手の質問に適切に答えられないことも多い。

たとえば、次の(7)の「フィレンツェ、には何があるんですか？」という日本語母語話者の発話は、「フィレンツェには何があるのか」という質問である。しかし、イタリア語を母語とする学習者は、これを「フィレンツェに行ってみたい」という意味で、質問ではないと誤解した。

(7) 相手：あと、えと台湾も行ったし、中国と、アメリカと。でも、ヨーロッパはあまり行けてなくて、イタリアおすすめありますか？
イタ：あー、もちろんフィレンツェとか。
相手：フィレンツェ。あ、へー。**フィレンツェ、には何があるんですか？**
イタ：行ったら教えてください。

誤解の原因は、「何」という疑問語や「か」という疑問を表す助詞、さらに質問のイントネーションに気づかなかったことだろう。この会話の直前で「行ってみたい場所」が話題になっていたため、その話題と「フィレンツェ」という「行ってみたい場所」である可能性が高い地名から、「フィレンツェに行ってみたい」という意味だと推測したのだと考えられる。そのため、自分に対する質問文を質問ではないと誤解したということである。

次の(8)の「けっこうあんこって、控え目な甘さじゃないですか。」という日本語母語話者の発話は「あんこは控え目な甘さだ」という意味で、質問ではない。しかし、英語を母語とする学習者は、これを「あんこはあなたには甘すぎないか」という質問だと誤解した。

(8) 相手：へえー。そうなんだ。（うん）**けっこうあんこって、控え目な甘さじゃないですか**。

英語：うん、あの私の、（うん）おばあさんが、（うん）あの、よくあのよく、あの、その、赤い豆を使って、（うんうんうん）あの、うーんと、あの、＊＊＊＊＊けど、その、赤い豆をデザートにするので、（ふーん）たぶん、私は、な、慣れています。その豆。

［（　）内の「うん」などは相手のあいづち。「＊＊＊＊＊」は聴取不能。］

誤解の原因は、「じゃないですか」が質問を表す上昇イントネーションではなく、下降イントネーションになっていることに気づかなかったことだろう。下降イントネーションの「じゃないですか」は、質問にはならない。この(8)のように、聞き手が知っていると思うことを述べて会話のテーマを導入する働きをすることが多い。この学習者は、そのような下降イントネーションの「じゃないですか」の用法を知らなかったのだろう。

次の(9)の「九州と、関、大阪、あの、関西とどっちがよかったですか？」という日本語母語話者の発話は、「九州と関西とどちらがよかったか」という質問である。しかし、フランス語を母語とする学習者は、これを「関西のどの場所がよかったか」という質問だと誤解した。

(9) 相手：**九州と、関、大阪、あの、関西とどっちがよかったですか**？

フラ：うーん。岸和田に住んでいましたが、

相手：岸和田に？

フラ：そう。だから、岸和田のところが好きです。

誤解の原因は、「関西と」の「と」という比較を表す助詞に気づかなかったことだろう。これが「九州と関西とどっちがよかったですか？」であれば、誤解しなかったかもしれない。実際には、「関、大阪、あの、」が入ってきて、「九州と」と「関西と」が離れたため、「九州と」との関係まで考えずに、「関西」と「どちらがよかった」だけを意味的に結びつけて、「関西のどの場所がよかったか」という質問だと誤解したのだと考えられる。

4.2　否定文についての誤解

学習者は対話の中で相手が発話した否定文を肯定だと誤解したり、肯定文を否定だと誤解したりして、相手の発話内容を反対の意味に理解することがある。

たとえば、次の(10)の「なんかべつにかまれもしないし、向かっても来ないし」という日本語母語話者の発話は、「動物はかまないし、向かってもこない」という否定の意味である。しかし、イタリア語を母語とする学習者は、これを「動物はかむか、引っかくかする」という肯定の意味だと誤解した。

(10) 相手：**なんかべつにかまれもしないし、向かっても来ないし**、ただなんか、「なでてくれー」って来るだけ、（うーん）あ、あっ、こわか、こわいと思ってたけど、ちゃんと向き合ってみれば、大丈夫なんだ、と思って、ちょっとなんかトラウマ克服して、（うーん）よかった。

イタ：あー、そうですか。私は動物が大好きです。

［（　）内の「うーん」は相手のあいづち］

誤解の原因は、後に否定の述語が来やすい「べつに」が出てきたり、否定を表す「ない」が２回出てきたのに気づかなかったことだろう。この会話の直前で「子どものころは動物がこわかった」ということが話題になっていたため、「動物がこわい」という内容の話が続いていると思い、「動物はかまないし、向かってもこない」という否定の意味ではなく、「動物はかむか、引っかくかする」という肯定の意味だと推測したのだと考えられる。

次の(11)の「全部いっしょじゃねえかと思った。」という日本語母語話者の発話は、「ビールの味は全部同じだと思った」という肯定の意味である。しかし、フランス語を母語とする学習者は、これを「ビールの味は全部同じじゃないと思った」という否定の意味だと誤解した。

(11) フラ：ドイツのビールはおいしいんですよ。
相手：おいしいね！　ただ、あんまり飲めないから、お酒。だから、ちょっとあんまり違いがわからなかった。**全部いっしょじゃねえかと思った。**

誤解の原因は、「じゃねえか」の「か」に気づかず、「じゃねえか」（じゃないか）を「じゃねえ」（じゃない）と同じように否定を表すと考えたことだろう。「全部いっしょじゃねえと思った」は「全部いっしょではない」という否定の意味になる。しかし、「全部いっしょじゃねえかと思った」は、イントネーションにもよるが、基本的には「全部いっしょだ」という肯定の意味になる。この学習者はその違いがよくわからなかったのだろう。

次の(12)の「けっこうイライラするどころじゃなかったですよ。」という日本語学習者の発話は、「とてもイライラした」という肯定の意味である。しかし、ドイツ語を母語とする学習者は、「イライラしなかった」という否定の意味だと誤解した。

(12) 相手：けっこう人数が多くて、あの一、祖父、祖母、叔母、母、兄、妹、で７人だったんですけど、ちょっと前まで叔父がいて 8 人でしたけど、結婚して、家を出たので、今、7 人なんですけど、この家族が一気にインフルエンザとかになったんですよ、去年の今ごろぐらいに。で、私しか、元気な人がいなくて、で、私が家事をやるはめに。
ドイ：えっと、7 人はね、私にとってできないと思う。私たちは 3 人で、えっと。ときどき、んー、イライラするとか。弟が、なんか、弟とお母さんが、
相手：いやー、**けっこうイライラするどころじゃなかったですよ。**

誤解の原因は、「イライラするどころじゃなかった」に否定を表す「ない」があるため、単純に否定だと考えたことだろう。「イライラするどころじゃなかった」は「イライラしなかった」という否定の意味ではなく、「イライラするよりもっと程度が激しかった」という肯定の意味を表すが、この学習者はそれを知らなかったのだろう。

4.3　省略文についての誤解

学習者は対話の中で省略された主語がだれのことかを誤解し、相手の発話内容をまったく違う意味に理解することがある。

たとえば、次の(13)の「さっき、シャンティさんも福岡に２週間いたけど、短かったって言ってて。」という日本語母語話者の発話は、「シャンティさんが言っていた」という意味である。しかし、ドイツ語を母語とする学習者は、これを「私（この発話の発話者である相手）が言っていた」という意味だと誤解した。

(13) 相手：私も韓国行ったことあるんですけど、（へー）５日しかいなかったです。ドイツの人って長く旅行しますよね。１週間は短かったですか。

ドイ：そうです。

相手：さっき、シャンティさんも福岡に２週間いたけど、短かったって**言ってて**。（うん）あのー、日本人だったら、なんか、２週間すごく長かったって言うだろうなと思って。　［（　）内の「へー」などは相手のあいづち］

誤解の原因は、「シャンティさんも」は「福岡に２週間いた」にしか係らず、「短かったって言ってて」までは係らないと考えたことだろう。一般に省略された主語は「私」のことが多いので、「言ってて」の主語が「シャンティさん」でなければ、「私」だと考えたのだろう。実際には、「シャンティさんも」は「シャンティさんは」と同じように、「～けど」を越えて、「言ってて」まで係っていくが、この学習者はそう思わなかったのだろう。

次の(14)の「いいですね。」という日本語母語話者の発話は、「インターネット注文のサービスはいい」という意味である。しかし、フランス語を母語とする学習者は、これを「アルバイトがあっていい」という意味だと誤解した。

(14) フラ：私はアルバイトをしています。

相手：どこでアルバイトをしていますか？

フラ：えーと、デパートで。えーとー、まあ、人々がインターネットで買い物をしていますね。

相手：はい。

フラ：えと、私は、えと、人々の買い物を、します。人がインターネットで、えーと、買い物を予約します。それは、えーと、

相手：フランスに住んでいる人ですか。

フラ：はい。えー、それで、私は、えーと、デパートの中に買い物をして、

相手：送ってあげたりするんですか？

フラ：はい、はい。

相手：そうすると、インターネットで注文した人はぜんぜん、あの、デパートに来なくてもその品物が手に入るっていうことですね。

フラ：はい。お客様の家にその物を送る。

相手：ああ。**いいですね**。

フラ：でも、ちょっと大変だけど。

誤解の原因は、次のようなことだと考えられる。この学習者はデパートの話ではなくアルバイトの話をしているつもりだったのだろう。この発話の前に相手が「アルバイトを探している」と言っていたこともあり、自分がアルバイトをしていることに対して「いいですね」と言われたのだと思ったのだろう。実際には、省略された語句は直前に出てきたものであることが多く、かなり前に出てきた「アルバイト」である可能性は低い。しかし、この学習者はそこまでは考えなかったのだろう。

次の(15)の「ヨーロッパでもいろいろあるみたいな感じで。」という日本語母語話者の発話は、「挨拶のキスの習慣はヨーロッパでもあったりなかったりして、いろいろだ」という意味である。しかし、フランス語を母語とする学習者は、これを「キスの習慣はヨーロッパでもいろいろある」という意味だと誤解した。

(15) フラ：フランスの習慣は、友達に会うとき、あの、ここは？［ほっぺを触って、単語を聞くしぐさをする］

相手：あ、ほっぺ。

フラ：ほっぺ。ほっぺの上でキスします。でも、日本人にとって、それは、あー、

変な習慣です。

相手：ま、変というか、あのう、ま、違う習慣で。やっぱり、チェコの人に聞いたんですけど、チェコの人もこう、ビズー、キスしないから、それはフランス、ヨーロッパでも**いろいろある**みたいな感じで。

誤解の原因は、「チェコの人もこう、ビズー、キスしないから」に気づかなかったことだろう。ヨーロッパでもキスしない国があると言っていることに気づかなかったため、「ヨーロッパでもいろいろある」を「キスの習慣のタイプがいろいろある」だと考え、「キスをする国とキスをしない国があって、いろいろだ」だとは思わなかったのだろう。

5　結論

中級日本語学習者が日本語母語話者と対話をしているとき、相手の発話に対して特に次のような誤解をしていることが明らかになった。

(a) 質問文についての誤解の例：上昇イントネーションに気づかず、自分に対する質問文を質問ではないと誤解する。下降イントネーションに気づかず、質問文でないものを自分に対する質問だと誤解する。

(b) 否定文についての誤解の例：「ない」に気づかず、否定文を肯定だと誤解する。「じゃないか」を「じゃない」と同じだと考え、肯定文を否定だと誤解する。

(c) 省略文についての誤解の例：省略された主語は「私」のことが多いので、そうではない場合でも、省略された主語を「私」だと思う。省略された主語を直前に出てきたものではなく、話題になっているものだと思う。

6　日本語教育への示唆

対話については、学習者がどう話しているかという研究が盛んに行われ、どう話したらよいかという教育も活発に行われてきた。しかし、学習者が相手の発話をどう聞きとっているかという研究は少なく、どう聞きとったらよいかという教育もあまり行われてこなかった。学習者がどう話しているかは比較的簡単に調査でき、教育方法も考えやすいが、学習者がどう聞きとっているかは簡単には調査できず、教育方法も考えにくいからである。

しかし、対話の教育では、どのように発話するかという「話す」教育だけではなく、相手の発話をどう理解するかという「聞く」教育も必要である。今回の調査結果からは、「聞く」教育では、特に質問文、否定文、省略文を適切に理解するための教育が重要であることが明らかになった。

＜参考文献＞

野田尚史・阪上彩子・中山英治（2015 予定）「中級日本語学習者が雑談に参加するときの聴解の問題点」，*The 22st Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings*, Princeton, NJ: Department of East Asian Studies, Princeton University. [http://www.princeton.edu/pjpf/past/22st-pjpf/]

渡邊亞子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』（日本語教育基礎研究シリーズ 3），くろしお出版.